

1. Theory, History, and U.S. Grand Strategy 1 1 8

1. リアリストを代表するような著作としては、E. H. Carr, *The Twenty Years' Crisis, 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations* (New York: Harper Torchbooks, 1964) [E・H・カー著、訳『危機の二十年：一九一九～一九三九』井上茂訳、岩波書店、一九九六年]；John J. Mearsheimer, *The Tragedy of Great Power Politics* (New York: W. W. Norton, 2001) [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]；Hans J. Morgenthau, *Politics among Nations: The Struggle for Power and Peace*, rev. Kenneth W. Thompson, 6th ed. (New York: Alfred A. Knopf, 1986) [ハンス・モーゲンソー著、現代平和研究会訳『国際政治—権力と平和』、福村出版、一九八六年]；Kenneth N. Waltz, *Theory of International Politics* (Reading, Mass.: Addison-Wesley, 1979) [ウォルツ、『国際政治の理論』]など。リアリズムに好意的なまとめとしては、Robert G. Gilpin, “No One Loves a Realist,” *Security Studies* 5, no. 3 (Spring 1996): 3-26; Gilpin, “The Richness of the Tradition of Political Realism,” in *Neorealism and Its Critics*, ed. Robert O. Keohane (New York: Columbia University Press, 1986), 301-21.

2. David L. Anderson, “Paradigm Lost,” *Diplomatic History* 25, no. 4 (Fall 2001): 700.

3. 国際政治は国家が中心となっている。なぜなら政治というのは組織化された社会集団の関係についてのものであり、国家がその社会組織の中で主要なものだからだ。リアリストたちはいわゆる「非国家行為者（ルビ：アクター）」（nonstate actors）の存在（たとえばテロ組織など）を認めるが、それでも国際政治における主なアクターは大国であると考えられるのだ。国際政治における「アナーキー」（無政府状態）とは、国際社会には世界政府のような国家の行動をしぼるルールを施行する強制力を持った権威が欠如している状態を表している。アナーキーは国際政治を「自助のシステム」にしている。脅威を受けたとき、国家には一一〇番をかけて守ってもらう相手がいないので、自分たちでその問題に対処しなければならないのだ。

4. ハンス・モーゲンソーが分析しているように、「われわれが、この国は非常に強く、あの国は弱いと述べることによってある国のパワーに言及する場合、それは比較の仕事を中心に意味しているのである・・・国際政治において最も初歩的かつ最も頻繁に犯す誤りのひとつは、パワーのこの相対性を無視し、それに代わって国家のパワーをまるで絶対的なものであるかのように扱うことである」のだ。Morgenthau, *Politics among Nations*, 174 [モーゲンソー、『国際政治』]。

5. アナーキー的な自助のシステムでは、大国たちの防御的な安全保障の希求は、ブーメランのようにさらなる不安定な状況をつくることになりかねない。国家が軍事力を増加させ、他国と同じように見境もなく反応することになれば、作用と反作用の終わりなきサイクルに突入することになる。ところが国際政治においては恐怖と不安定な状態が普通の状態であるために、大国たちにはこれを避ける実質的な方法が存在しないことになるのだ。この「安全保障のジレンマ」（security dilemma）というのは、もっと正確に言えば「不安定な状況」であると捉えることができる。なぜなら大国にはライバルが存在する限り、安全保障が自動的に保証されることはないからだ。これについては、John Herz, *Political Realism and Political Idealism* (Chicago: University of Chicago Press, 1951), 24.を参照のこと。また、Robert Jervis, “Cooperation under the Security Dilemma,” *World Politics* 30, no. 2 (January 1978): 167-214.も参照。

6. Waltz, *Theory of International Politics*, 91-92. 似たような見解としては、Gilpin, “Richness of Political Realism,” 305; Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, xi, 13-14, 31, 35 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』] .

7. オフェンシヴ・リアリストとディフェンシヴ・リアリストを分ける主な論点については、William Curtis Wohlforth, *The Elusive Balance: Power and Perceptions during the Cold War* (Ithaca: Cornell University Press, 1993), 11-14; Fareed Zakaria, *From Wealth to Power: The Unusual Origins of America's World Role* (Princeton: Princeton University Press, 1998), 13; Eric J. Labs, “Offensive Realism and Why States Expand Their Security Alms,” *Security Studies* 6, no. 4 (Summer 1997): 7-8; Gideon Rose, “Neoclassical Realism and Theories of Foreign Policy,” *World Politics* 51, no. 1 (October 1998): 149.などを参照のこと。

8. ディフェンシヴ・リアリストとオフェンシヴ・リアリストたち国際政治の結果や国家の大戦略についてパワーの分布がどのような影響を与えるのかという仮説の分析については、Jack S. Levy, “The Causes of War: A Review of Theories and Evidence,” in *Behavior Society, and Nuclear War*, vol. 1, ed. Philip E. Tetlock, Jo L. Husbands, Robert Jervis, Paul C. Stern, and Charles Tilly (New York: Oxford University Press, 1989), 228-35, 256-58. を参照。その他にも、Benjamin Miller, “Competing Realist Perspectives on Great Power Crisis Behavior,” *Security Studies* 5, no. 3 (Spring 1996): 309-57. を参照のこと。その不安定なパワーの配分——常に存在する二国で一国を潰そうとする誘惑——のおかげで、三極状態は多極状態（大国が四カ国以上ある状態のこと）とは別個の形のものとしてとらえられるべきであることになる。これについては Randall L. Schweller, *Deadly Imbalances: Tripolarity and Hitler's Strategy of World Conquest* (New York: Columbia University Press, 1998); Waltz, *Theory of International Politics*, 163 [ウォルツ、『国際政治の理論』] . ジョン・ミアシャイマーは「安定したシステム」（パワーが大国間でほぼ均等に分配されている）と「不安定なシステム」（パワーがひとつの大国、つまりその定義から言えば潜在覇権国にとって有利な状態で非対称的に分布しているもの）に区別している。Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 44-45 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』] .

9. Barry R. Posen, *The Sources of Military Doctrine: France, Britain, and Germany between the World Wars* (Ithaca: Cornell University Press, 1984), 16-19; Walt, *War and Revolution*, 4, 18-19; Charles Glaser, “Realists as Optimists: Cooperation as Self-Help,” *International Security* 19, no. 3 (Winter 1994-1995): 71-72. オフェンシヴ・リアリストたちは二極システムのほうが多極システムよりも安定していると考え、ディフェンシヴ・リアリストはこの点について異なった意見を持っている。ミアシャイマー、ポーゼン、そしてウォルツは、二極状態のほうがより安定的であると主張している。Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 338-44 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』] ; Posen, *Sources of Military Doctrine*, 63-65; Waltz, *Theory of International Politics*, 161-76 [ウォルツ、『国際政治の理論』] ; Kenneth N. Waltz, “The Stability of a Bipolar World,” *Daedalus* 93, no. 3 (Summer 1964): 881-909. 多極システムのほうが安定しているとする議論については、Dale C. Copeland, “Neorealism and the Myth of Bipolar Stability,” *Security Studies* 5, no. 3 (Spring 1996): 30-89. を参照のこと。また、Stephen Van Evera, “Primed for Peace: Europe after the Cold War,” *International Security* 15, no. 3 (Winter 1990-1991): 33-40. も参照。

10. Stephen Van Evera, *Causes of War: Power and the Roots of Conflict* (Ithaca: Cornell University Press, 1999), 6, 9. 同様に、ファリード・ザカリアもディフェンシヴ・リアリストたちが「国

際システムは、大国を抑制的で理性的な行動するようなインセンティブを与える」と考えていると指摘している。Zakaria, “Realism and Domestic Politics: A Review Essay,” *International Security* 17, no. 1 (Summer 1992): 190.

11. Jeffrey W. Taliaferro, “Security Seeking under Anarchy: Defensive Realism Revisited,” *International Security* 25, no. 3 (Winter 2000-2001): 131, 136-41. ディフェンシヴ・リアリストが「国際政治システムは大国に拡大をさせないようにする」と考えるもう一つの理由は、征服が経済的に割りに合わない、という点にある。Van Evera, “Primed for Peace,” 14-16. この議論はRichard Rosecrance, *The Rise of the Trading State* (New York: Basic Books, 1986). が元になっている。それに対する反論としては、Peter Lieberman, *Does Conquest Pay? Exploitation of Occupied Industrial Societies* (Princeton: Princeton University Press, 1996). を参照のこと。

12. Van Evera, *Causes of War*, esp. chap. 6. ヴァン・エヴェラは123頁で、「侵攻が困難な場合、国家は勝利にはコストがかかったり獲得不能だと感じさせることによって抑止できる」と論じている。彼はまた「本物の支配状態というのは近代に入ってからほとんど起こっていない」と主張（190-91頁）しており、192頁では「現代の大国の安全保障にとって最も脅威なのは自国なのだ」と指摘している。その理由は、攻撃の有効性を過信してしまうからだというのだ。これについてはJack Snyder, *Myths of Empire: Domestic Politics and International Ambition* (Ithaca: Cornell University Press, 1991), 22-23. も参照のこと。

13. 「侵攻が難しい場合、国家は自国の安全保障によっておとなしくなった隣国や、他国を攻撃するコストの高さによって守られるのだ。したがって、国家が攻撃される見込みは低くなる。これによって全ての国家はさらに安全になるのであり、したがって平和的な政策をさらに追求するようになるのだ。」Van Evera, *Causes of War*, 125; Glaser, “Realists as Optimists,” 51-52, 58-60, 64, 67; Sean M. Lynn-Jones, “Offense-Defense Theory and Its Critics,” *Security Studies* 4, no. 4 (Summer 1995): 670. また、ディフェンシヴ・リアリストたちは核兵器の登場は（少なくとも核武装したライバル間での）バランスを防御側に決定的にシフトしたと考えている。これについてミアシャイマーのようなオフエンシヴ・リアリストたちは、攻勢・防御バランスは核レベルでも生きていると認めつつも、それは通常兵器のレベルには影響がないとしている。John J. Mearsheimer, “Back to the Future: Instability in Europe after the Cold War,” *International Security* 15, no. 1 (Summer 1990): 13 n. 14.

14. Glaser, “Realists as Optimists,” 70-72.

15. Paul Kennedy, *The Rise and Fall of the Great Powers: Economic Change and Military Conflict from 1500 to 2000* (New York: Random House, 1987) [ポール・ケネディ著、鈴木主税訳『大国の興亡——一五〇〇年から二〇〇〇年までの経済の変遷と軍事闘争』（上下巻）、草思社、一九八八年] ; Snyder, *Myths of Empire*, 6; Lynn-Jones, “Offence-Defense Theory,” 664 n.10.

16. Posen, *Sources of Military Doctrine*, 68-69 (強調箇所は原文のまま). 同様に、ヴァン・エヴェラも以下のように主張している。「侵略する側は成功するよりも失敗することのほうが多い。侵略というのは成功しづらいのだ。侵略する側は大抵の場合は封じ込められるか破壊されるかだ。」Van Evera, *Causes of War*, 9. これについては Stephen M. Walt, *The Origins of Alliances* (Ithaca: Cornell University Press, 1987), 17-18, 27. も参照のこと。

17. 軍国主義、過激な民族主義、社会帝国主義、そして社会の階層化などの国内的な要因

は、おそらくそのような欲深い戦略の原因となり、支配的なエリートたちを「拡大は勝利に導く戦略だ」と勘違いさせてしまうらしい。これについてはJack Snyder, *The Ideology of the Offensive: Military Decision Making and the Disasters of 1914* (Ithaca: Cornell University Press, 1984); Snyder, *Myths of Empire*, Van Evera, *Causes of War*, 256-57; Van Evera, “Primed for Peace,” 18-29. を参照。また、Glaser, “Realists as Optimists,” 391-94; Schweller, “Realism’s Status-Quo Bias: What Security Dilemma?” *Security Studies* 5, no. 3 (Spring 1996): 90-121; Schweller, “Bandwagoning for Profit: Bringing the Revisionist State Back In,” *International Security* 19, no. 1 (Summer 1994): 72-107.なども参照のこと。

18. この点や他の点についてのディフェンシヴ・リアリズムの優秀な批判としては、Zakaria, *From Wealth to Power*, 11, 28, 34; Zakaria, “Realism and Domestic Politics,” 177-98.を参照のこと。

19. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, xi, 13-14, 35 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]; Zakaria, *From Wealth to Power*, 13; Labs, “Offensive Realism and War Aims,” 1, 7-8.

20. 国際政治という競争の激しい分野では、「相対的なパワーを最大化させることによって安全保障を最大化しようとする戦略は、アナーキーに対する合理的な反応である」のだ。Labs, “Offensive Realism and War Aims,” 12, 15. また、これについては Zakaria, *From Wealth to Power*, 19, 30.を参照のこと。

21. 国家の拡大が「安全保障のジレンマ」を引き起こすという主張は、「防御的、そして抑止的な軍事体制というのは緩和的な効果があり、攻撃的なドクトリンはその逆である」というポゼンの分析の中に暗黙の了解として見ることができる。Posen, *Sources of Military Doctrine*, 16, 19. スナイダーはその分析をさらに進めて、国際的なシステム面での制約は「それ自体だけでは過剰拡大や大国間の紛争的な関係の理由とはならない」と主張している。Snyder, *Myths of Empire*, 13.

22. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 33 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』].

23. テリスが言うように、「競争相手の国が軍事力を使って自分たちの存在や自律性を脅かすようなことをしないと絶対的な確信をもてる国は存在しないため、すべての国は先に競争相手を消滅させたり支配下におこうとするもの」なのだ。Ashley J. Tellis, “The Drive to Domination: Towards a Pure Realist Theory of Politics” (PhD diss., Department of Political Science, University of Chicago, 1984), 381.

24. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 34, 35 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]. これについて Tellis, “Drive to Domination,” 381.も参照のこと。

25. ミアシャイマーが言うように、「弱い国家はより強力な国家とはあまり戦おうとしないものだ。なぜなら弱い国家は軍事的敗北を被りやすいから」なのだ。Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 33 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』].

26. Ibid., 5-6. 国家がライバル国との短期・長期におけるパワーの関係を讀もうとする時に直面する不確実性については、Tellis, “Drive to Domination,” 372 n. 4. モーゲンソーは「大国

は計算を多少誤ってもバランス・オブ・パワーを維持できるように余裕をもとうとするものである。このためには、パワー争いに積極的に参加している全ての国家は、実際はバランス・オブ・パワー——つまりパワーが平等な状態——ではなくて、自分にとって有利なパワーの状態を狙わなければならないことになる」のだ。Morgenthau, *Politics among Nations*, 227-28 [モーゲンソー、『国際政治』]。これについては Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 34-35 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]。も参照のこと。

27. Ibid., 40.

28. ミアシャイマーが言うように、「全ての大国は世界を支配したがるのだが、今までどの国家も世界覇権国になれるだけの軍事力を持たなかったし、これからもそういう国家はあらわれそうにもない」のである。Ibid., 236.

29. Ibid., 41.

30. Ibid., 40-42.

31. Ibid., 41, 140-41.

32. Ibid., 168.

33. この点についてはオフエンシヴ・リアリストとディフェンシヴ・リアリストは同意する。これについては Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 44 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]；Walt, *Origins of Alliances*, 23-25；Robert Jervis, “Cooperation under the Security Dilemma,” *World Politics*, 30, no. 2 (January 1978): 194-95. を参照のこと。一九四〇年代初頭にスパイクマンは、ユーラシアの強力な国家からのアメリカの安全を実現させるための機能として、地理（距離）と軍事能力（航空・海上戦力）の二つの要因の相互的効果が重要であると分析した。Nicholas J. Spykman, *America's Strategy in World Politics: The United States and the Balance of Power* (New York: Harcourt, Brace and World, 1942), 441.

34. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 135-36 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]。

35. これについてジャーヴィスは、「ヨーロッパの狭い大陸では安全保障にとって必要なことは調和させにくい」と控えめに述べている。Jervis, “Cooperation under the Security Dilemma,” 183.

36. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 126, 135-36 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]；Jervis, “Cooperation under the Security Dilemma,” 194-95.

37. Mearsheimer, “Back to the Future,” 13 n. 15.

38. Ibid.

39. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 143 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]。

40. Ibid., 212-13.

41. たとえば彼は（212～213頁）、「ナポレオン、ヴィルヘルム皇帝、ヒトラーは、それぞれ主要な戦場で勝利をおさめ、大きな領土を征服して目標達成まであと少しというところまで来て、ヨーロッパの完全支配には失敗したのである」と言っている。これは覇権が勝利につながる戦略であることを証明しておらず、これらの例はただ単に成功しかけただけで、実際の大戦略ではないのだ。ナポレオン率いるフランス、ヴィルヘルム率いるドイツ、そしてナチス・ドイツなど、これらの国々はすべて覇権を求めて手痛い被害を被ったのである。この三カ国は、自分たちの行った行為によって力尽き、それぞれが政治体制の転換を迫られることになったのだ。ミアシャイマーは自身の主張を支持するために、一九三九年のドイツのポーランドに対する勝利（39～40頁）や一九四〇年のフランスに対する勝利などを挙げており、「もしヒトラーがフランスを攻略した後に自制してソ連を侵攻しなければ、ナチスの武力侵攻はまんまと成功していただろう」と分析している。ドイツがフランスを打ち負かした後に「抑制」すれば良かったという提案は、彼自身のオフエンシヴ・リアリズムの「大国はライバルを打ち負かして地域覇権を獲得した場合にだけ安全を確保できる」という原則と完全に矛盾していることになる。ミアシャイマーの理論はドイツが一九四一年に実際に行ったこと、つまりヨーロッパで覇権を獲得するための最後の障害であるソ連を消滅させようとしたことを予測している。

42. ミアシャイマーは、「五分の一の成功率はあまり高いとは言えない」が、それでも「アメリカのケースは、地域覇権を達成するのは可能であることを証明している」と書いている。ところが実際のところ、その成功率は五分の一ではなくて、八分の一である。地域覇権に挑戦した国家はアメリカだけではなく、帝国自体の日本、ナポレオン時代のフランス、ヴィルヘルム時代のドイツ、そしてさらにハプスブルグ帝国（カール五世）、スペイン（フェリペ二世）、そしてルイー四世時代のフランスである（最後の三つのケースはミアシャイマーが一九九一年に書いた論文ではリストに含まれていたが、二〇〇二年に出版された本の中のリストでは除外されていた）。

43. アメリカの地域覇権の獲得についての似たような議論としては、Colin Elman, “Extending Offensive Realism: The Louisiana Purchase and America’s Rise to Regional Hegemony,” *American Political Science Review* 98, no. 4 (November 2004): 563-76.を参照のこと。

44. John J. Mearsheimer, “The Future of the American Pacifier,” *Foreign Affairs* 80, no. 5 (2001): 49.

45. ミアシャイマーは「個別の国家の対外政策と国際的な流れを説明することができるものとしてオフエンシヴ・リアリズム」を提唱している。*Tragedy of Great Power Politics*, 422 n. 60 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』]。ところがミアシャイマーが提唱しているのは「構造理論」と「大戦略の理論」というわけでは全くなく、むしろ大戦略についての二つの特徴ある理論なのだ。それはユーラシア大陸の大国にとってのオフエンシヴな理論であり、島国の大国にとってのディフェンシヴな理論である。

46. ミアシャイマーは現状維持国家のコンセプト——つまり「既存のバランス・オブ・パワーを維持すること」を狙う大国——はディフェンシヴ・リアリストのコンセプトであると認めている。Ibid., p.21. 彼は他の箇所でも、「アメリカは現在この地球で一番強力な国家だが、しかし西半球で行ったようなやり方でヨーロッパや北東アジアを支配できていないし、それらの地域を征服してコントロールしようという考えも持っていない。これは主

に水（海）という地理的障害物による抑制力が働いているからだ」と言っている。Ibid., 41. これについては 140-41, 170, 235-36.も参照のこと。

47. Ibid., 236-37. 地域覇権国にとって、水（海）というのは一方向にしか制止力を発揮しないようだ。この制止力によって、大国は遠い地域で覇権を達成できなくなるのだが、別の覇権国——これをミアシャイマーは「競争相手国」と言っているが——が脅威を及ぼしてくるのは防がないというのだ。その結果、彼は以下の箇所（41, 42, 236～37頁）において、「地域覇権を達成した国家」は「他の地域で別の大国が同じことをしようとするのを防ごうとする」という。そしてその理由は、これらの競争相手国が自分たちの裏庭でトラブルを発生させることができるからだというのだ。

48. Ibid., 42, 141, 236-37, 252.

49. ミアシャイマーの言葉を借りれば、「オフエンシヴ・リアリズムが予測するのは、ヨーロッパに潜在覇権国が出現し、しかも同じ地域にある大国が、自分たちだけでその潜在覇権国を封じ込めることができなくなると、アメリカは大西洋を越えて軍隊を派遣する、ということである。Ibid., 252; see also 237.

50. ミアシャイマーは「アメリカはヨーロッパや北東アジアへ部隊を派遣することを避け、派遣しなければならなくなった場合でも、なるべく早く部隊が帰国できるように努めた」と言っている。Ibid., 235.

51. Ibid., 239. また、ibid., 265-66.も参照。

52. Patrick E. Tyler, “U.S. Strategy Plan Calls for Insuring No Rivals Develop,” *New York Times* (March 8, 1992), A1.

53. *A National Security Strategy of Engagement and Enlargement* (Washington, D.C.: The White House, 1995), 1; “Remarks by Samuel R. Berger,” June 18, 1996, <http://clinton6.nara.gov/1996/06/1996-06-18-remarks-by-samuel-berger-at-the-wilsoncenter.html>.

54. President Bill Clinton, “Remarks to the People of Detroit,” October 22, 1996, <http://clinton6.nara.gov/1996/10/1996-10-22-president-speech-on-foreign-policy-in.detroitmi.html>.

55. *Report of the Quadrennial Defense Review* (Washington, D.C.: Department of Defense, May 1997), v, 5.

56. ロナルド・プルーセンは歴史家と政治学者たちは一九四〇年代後半から一九五〇年代までのアメリカの大戦略を再検証して、それが「潜伏的一極状態」を表していたのかどうかをしてみるべきだと提案している。Ronald W. Preussen, “Book Review: James McAllister, *No Exit: America and the German Problem, 1943-1954*,” *Journal of Cold War Studies* 6, no. 3 (Summer 2004): 151. ところが一九四〇年代から五〇年代にかけてのアメリカの一極状態の実現への野望は「潜伏的」ではなかったのだ。

57. “Remarks by Dr. Condoleezza Rice to the International Institute of Strategic Studies,” London, June 26, 2003, www.whitehouse.gov/news/releases/2003/06/print/20030626.html.

58. Patrick E. Tyler, “Pentagon Drops Goal of Blocking New Superpowers,” *New York Times*, 24 May 1992. 同様に、ジョージ・W・ブッシュ大統領は大国間の関係の特徴である「破壊的な国家の競争関係」を公然と非難している。彼はアメリカが「挑戦できないほど」の軍事的

を維持することによって「過去に行われたような軍拡競争をやめさせ、競争関係を貿易などの平和的なものの追求に制限する」と言っている。President George W. Bush, Graduation Speech at United States Military Academy, June 1, 2002. <http://www.whitehouse.gov/news/releases/2002/06/print/20020601-3.html>.

59. *National Security Strategy of the United States*.

60. Zalmay Khalilzad, "Losing the Moment? The United States and the World after the Cold War," *Washington Quarterly* 18, no. 2 (Spring 1995): 94.

61. Fred Charles Ikle, "The Ghost in the Pentagon," *National Interest* 19 (Spring 1990): 14.

62. *1997 Quadrennial Defense Review*, 12.

63. "Remarks by Secretary of Defense William J. Perry to the Japan Society," New York City, September 12, 1995, *Defense Issues* 10, no. 87. <http://www.defenselink.mil/speeches/1995/s19950912-perry.html>.

64. Secretary of Defense William S. Cohen, "Remarks Prepared for Delivery at Microsoft Corporation," Redmond, Wash., February 18, 1999, <http://www.defenselink.mil/speeches/1999/s19990218-secdef.html>. *Emphasis added*.

65. *Quadrennial Defense Review Report* (Washington, D.C.: Department of Defense, September 2001), 15.

66. Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 79 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』].

67. *Ibid.*, 528 n. 63 (強調部分は挿入). 同様に、ミアシャイマーは一九九一年に「EC（後にEU）に対する軍事組織であるNATOにおけるアメリカの覇権的な立場は、アナーキーが西側の民主制国家に与える影響を緩和し、彼らの協力関係の土台となった」と書いている。Mearsheimer, "Back to the Future," 47. 強調部分は挿入。

68. 「もしある国が覇権を達成してしまうと、国際システムはアナーキー的であることを止めて階層的になるのである。」 Mearsheimer, *Tragedy of Great Power Politics*, 415 n. 13 [ミアシャイマー、『大国政治の悲劇』].

69. *Ibid.*, 265-66.

70. Kenneth Waltz, "Evaluating Theories," in *Realism and the Balancing of Power: A New Debate*, ed. John A. Vasquez and Colin Elman (Upper Saddle River, N.J.: Prentice-Hall, 2003), 91.

71. ザカリアの言葉では、台頭する国家というのは「いつどこでも拡大する」というわけではなく、「むしろ周辺国が弱い状態にある有利な時に拡大する」というのだ。Zakaria, *From Wealth to Power*, 20.

72. ニコラス・スパイクマンが分析したように、「アメリカの発展と拡大は、イタリアを除く全てのヨーロッパの大国たちに妨害された。われわれが覇権を達成できたのは、ただ単にヨーロッパ大陸の国々がわれわれに対してまとまって対抗することができず、地元でのバランス・オブ・パワーに没頭していたために、大西洋を越えて大規模な国家資源を投入することができなかつたから」なのだ。Spykman, *America's Strategy in World Politics*, 448-49. 同じような議論については、Karen A. Rasler and William R. Thompson, *The Great Powers and*

Global Struggle, 1490-1990 (Lexington: University Press of Kentucky, 1994), 18.

73. 門戸開放「修正史観主義」の他にも、冷戦の史観の主な学派としては「冷戦伝統派」（これは後に冷戦後の「新伝統派」を台頭させた）と「ポスト修正史観主義」がある。主な論点や学派について述べたものとしては、Jerald A. Combs, *American Diplomatic History: Two Centuries of Changing Interpretations* (Berkeley: University of California Press, 1983), and Michael Hogan, ed., *America in the World: The Historiography of American Foreign Relations since 1941* (Cambridge: Cambridge University Press, 1995). 他にも便利なものとしてはMichael Kort, *The Columbia Guide to the Cold War* (New York: Columbia University Press, 2001). 一九四一年までさかのぼった歴史文献をまとめてあり、冷戦後の大戦略の研究にとってかかせないものとしては、Michael Hogan, ed., *Paths to Power: The Historiography of American Foreign Relations to 1941* (Cambridge: Cambridge University Press, 2000).を参照のこと。

74. Joseph A. Fry, “From Open Door to World Systems: Economic Interpretations of Late Nineteenth Century American Foreign Relations,” *Pacific Historical Review* 65, no. 2 (May 1996): 27.

75. David Healy, *US. Expansionism: The Imperialist Urge in the 1890s* (Madison: University of Wisconsin Press, 1970), 255.

76. Robert Gilpin, *War and Change in World Politics* (Cambridge: Cambridge University Press, 1981), 95, 24.

77. The seminal work of the Open Door school is William Appleman Williams, *Tragedy of American Diplomacy* (New York: Delta, 1962) [ウィリアムズ、『アメリカ外交の悲劇』]. アメリカの大戦略についての歴史的な議論にそれがどのような影響を与えたのかについてのバランスのとれた調査を行ったものとしては、Bradford Perkins, “*The Tragedy of American Diplomacy: Twenty-Five Years After*,” in Lloyd C. Gardner, *Redefining the Past: Essays in Diplomatic History* (Corvallis: Oregon State University Press, 1986), 21-34. を参照のこと。パーキンスが示しているように、ウィリアムズの解釈はアメリカの大戦略の説明としては「刺激的ではあるが、青写真そのものではない」のだ。

78. ヴェトナム時代の批判者たちは、門戸開放学派などは正統的な歴史研究の資格がなく、学問的な慣習を守っていないと主張していた。これについては Robert James Maddox, *The New Left and the Origins of the Cold War* (Princeton: Princeton University Press, 1973).を参照。さらに筋の通った批判としては、Robert W. Tucker, *The Radical Left and American Foreign Policy* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1971).を参照のこと。

79. Michael Hogan, “The ‘Next Big Thing’: The Future of Diplomatic History in a Global Age,” *Diplomatic History* 28, no. 1 (January 2004): 13.

80. 政治的・経済的門戸開放は、ウィルソン主義、もしくはリベラルのイデオロギーの影響のあらわれである。結局のところ、ウィルソン主義とは「民主的な民族自決を尊重し、非差別的なマーケットを助長するような世界のみが国家の安全と国内の自由を確保できる、平和的な国際的な秩序を確保できるような制度的メカニズムをもっている」というものだ。Tony Smith, *America’s Mission: The United States and the Worldwide Struggle for Democracy in the Twentieth Century* (Princeton: Princeton University Press, 1994), 327.

81. 「中核的な価値観」というコンセプトについては、Melvyn P. Leffler, *A Preponderance of*

Power: National Security, the Truman Administration, and the Cold War (Stanford: Stanford University Press, 1992), 13; Leffler, “National Security,” in *Explaining the History of American Foreign Relations*, ed. Michael Hogan and Thomas G. Paterson (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), 202-13.などを参照のこと。

82. Frank Ninkovich, *Modernity and Power: A History of the Domino Theory in the Twentieth Century* (Chicago: University of Chicago Press, 1994), 53.

83. Williams, *Tragedy of American Diplomacy*, 11, 21-30, 79, 82, 200, 210 [ウィリアムズ、『アメリカ外交の悲劇』]。

ウィリアムズは門戸開放の源泉について、経済の停滞が「民主制と社会平和」という国内の目標を脅かすとアメリカの政策家たちは考えており、そのために彼らは「海外への経済拡大がその危険を終わらせる主な手段になると結論づけた」と説明（30頁）している。他にも彼は、門戸開放政策が「経済の拡大はアメリカの繁栄や国内政治の安定（186-87, 206頁）に必要である」とする**信仰**——アメリカの海外マーケットへの依存という客観的じゃ状況ではなく——を基礎においたものであることを強調している。実際のところ、一七八九年から一九七〇年代まで、輸出入の合計高はアメリカのGDPのたった六〜一〇パーセントしか占めていないのだ。輸出入高が現在のようなレベル（一六〜二二パーセント）になったのはようやく一九八〇年代の最初になってからであり、この数値も先進工業国の中では最も低いものである。

84. *Ibid.*, 116.

85. *Ibid.*, 43. ウィリアムズ（229頁）は、時間の経過と共に、門戸開放を下支えしてきたようなテーマ（アメリカの「例外主義」やフレデリック・ジャクソン・ターナーの「フロンティア」など）が「一つのイデオロギーに合成された」と論じている。オッド・アルネ・ウェスタッドは、アメリカの対外政策エリートのイデオロギーは「意義あるコンセプト」であるとしており、その理由として「アメリカの対外政策のエリートたちが定めた国家の国際的な目的は、これまでの三・四世代続けて驚くほどの首尾一貫性で守っているからだ」としている。彼から見れば、この視点は「世界に自由を広めるというアメリカの責任」を強調するものであり、これは実質的に政治・経済的な門戸開放（もちろん彼はこのような言葉を使っていないが）ということになる。Odd Arne Westad, “The New Cold War International History: Three (Possible) Paradigms,” *Diplomatic History* 24, no. 4 (Fall 2000): 554.

86. ウィリアムズの議論は経済や政治的な要因ではなく、究極的にはアイディアに依るところがあるのではないかというJ・A・トンプソンの批判に対して、ジョセフ・フライは「それこそまさに正しい指摘だ」と答えている。ウィリアムズはアメリカの政策家たちや主な経済アクターたちが「経済の拡大、アメリカの国家安全保障、経済の繁栄、そして国内の政治制度は全て一緒に関連している」という世界観を共有していたことを強調していた。フライは「『アメリカ外交の悲劇』の最も永続的な特徴」として、国益についての感覚や国益を追求するアメリカの政策を形成する際にアイディアが果たす役割についてのウィリアムズの議論であるとしている。Fry, “Open Door to World System,” 300.

87. Ross A. Kennedy, “Woodrow Wilson, World War I, and an American Conception of National Security,” *Diplomatic History* 25, no. 1 (Winter 2001): 1.

88. *Ibid.*, 3.

89. Frank Ninkovich, *The Wilsonian Century: US. Foreign Policy since 1900* (Chicago: University of Chicago Press, 1999), 124.
90. ウィルソン主義のイデオロギーは「物理的な侵略の脅威」よりも、「リベラルな民主制に敵対的な勢力のある世界の政治環境に毒されること」の可能性を心配するものだ。Ibid., 13.
91. Ibid., 125.
92. Williams, *Tragedy of American Diplomacy*, 43, 49 [ウィリアムズ、『アメリカ外交の悲劇』] .
93. Healy, *US. Expansionism*, 39.
94. Williams, *Tragedy of American Diplomacy*, 155 [ウィリアムズ、『アメリカ外交の悲劇』] .
95. 一例として、Wayne S. Cole, *An Interpretive History of American Foreign Relations* (Homewood, Ill.: Dorsey Press, 1968); Healy, *US. Expansionism*, Walter LaFeber, *The Cambridge History of American Foreign Relations*, vol. 2: *The American Search for Opportunity, 1865-1913* (Cambridge: Cambridge University Press, 1993).を参照のこと。
96. John Gallagher and Ronald Robinson, “The Imperialism of Free Trade,” in *The Decline, Revival, and Fall of the British Empire: The Ford Lectures and Other Essays by John Gallagher*, ed. Anil Seal (Cambridge: Cambridge University Press, 1982).
97. Williams, *Tragedy of American Diplomacy*, 37-38 [ウィリアムズ、『アメリカ外交の悲劇』] .
98. Ibid., 88-89; 124.
99. Ibid., 59-64.
100. Ibid., 196-98.
101. Ibid., 172.
102. Ibid., 98-101; 111-113; 183-200. ドイツと日本が政治的に閉鎖的になると門戸開放に対して脅威を及ぼすというアメリカ側の受け取り方について触れたものとしては、Thomas McCormick, “‘Every System Needs a Center Sometimes’: An Essay on Hegemony and Modern American Foreign Policy,” in Gardner, *Redefining the Past*, 202-3. ボリシェヴィキがアメリカの価値観について及ぼす脅威については、N. Gordon Levin, *Woodrow Wilson and World Politics: America’s Response to War and Revolution* (New York: Oxford University Press, 1970).を参照のこと。
103. 商業的リベラリズムについての優れた議論としては、Arthur A. Stein, “Governments, Economic Interdependence, and Cooperation,” in Tetlock et al., eds., *Behavior, Society, and International Conflict*, 241-324.を参照のこと。
104. Rosecrance, *Rise of the Trading State*.

105. Williams, *Tragedy of American Diplomacy*, 123-27, 166 [ウィリアムズ、『アメリカ外交の悲劇』]。門戸開放には秩序と安定性が必要であるにもかかわらず、海外に対するアメリカの経済・政治面での浸透は、革命やナショナリズムという形で不安定を引き起こすような反動を生じさせることになる。したがって門戸開放というのはアメリカの軍事介入を必要とするような状況そのものをつくり出すことが多いのだ。これについては、LaFeber, *American Search for Opportunity*.を参照のこと。

106. Williams, *Tragedy of American Diplomacy*, 125 [ウィリアムズ、『アメリカ外交の悲劇』]。

107. Kenneth Waltz, *Man, the State, and War: A Theoretical Analysis* (New York: Columbia University Press, 1959), 118.

108. マイケル・ドイルは一九八三年に発表した記念碑的な論文の中で、このようなウィルソン主義的な伝統に学者的な解釈を加え、後に「民主的平和論」と知られるようになった議論を展開した。Michael Doyle, “Kant, Liberal Legacies, and Foreign Affairs: Part I,” *Philosophy and Public Affairs* 12, no. 3 (Summer 1983): 205-35.

109. Williams, *Tragedy of American Diplomacy*, 210 [ウィリアムズ、『アメリカ外交の悲劇』]。

110. Ibid.

111. 覇権安定論については、Robert Gilpin, *US. Power and the Multinational Corporation: The Political Economy of Foreign Direct Investment* (New York: Basic Books, 1975); Gilpin, *War and Change*, Charles P. Kindleberger, *The World in Depression, 1929-1939* (Berkeley: University of California Press, 1975).などを参照のこと。

112. McCormick, “Every System Needs a Center,” 199.

113. マコーミックは覇権国の軍事的役割を説明する際に「審判」や「刑事」という言葉を使っている。Ibid.

114. オフェンシヴ・リアリズムの第一世代の二つの有名な著作は、Zakaria, *From Wealth to Power*, and Eric J. Labs, “Offensive Realism and War Alms.” オフェンシヴ・リアリズムの第一世代は、Gilpin in *War and Change*.が敷いた土台を元にして理論を構築している。

115. Zakaria, *From Wealth to Power*, 9-10, 18-22.

116. ザカリアが言うように、「安全保障や、保護を必要とする国益の定義というのは、大抵の場合は国家の物理的資源と共に拡大するもの」なのだ。Ibid., 184-85.

117. Zakaria, *From Wealth to Power*, 5, 18-20. 似たようなものとしてはロバート・ギルピンの「国家のパワーが増加するにしたがって、この国家はコントロールする領土や政治的影響力、そして／もしくは国際経済の支配の範囲を広げようとする」というコメントがある。Gilpin, *War and Change*, 106.

118. ザカリアが言うように、大国の拡大は様々な形をとることがある。「物理的な資源において大規模な発展を経験した国家は、軍事費の増加や戦争の実行、領土の獲得、兵士や外交官の任命、そして大国の意思決定に参加することなどで見られるように、比較的早めに海外の政治的権益を再定義して拡大するのだ。Zakaria, *From Wealth to Power*, 3.